

『ジャックダニエルと社風の関係』

アメリカのテネシー州にあるナッシュビルという町にファン・モーター修理の突発工事で水畑さんを同行して行ってまいりました。『突発ならどこでも行くんか？』と呆れられそうですが、どうぞ呆れてください。この仕事の話聞いた0.3秒後に『はい、もちろん行きます！！』と返事をしていました。会社に帰ってから地図で場所を調べたところ、あの小泉首相がブッシュ大統領の前で『グローリー〜グローリー〜』と叫んで世界中の通信社を凍て付かせてしまったプレスリー記念館があるメンフィスの近くであることが判明しガッツポーズ！ということはアメリカのカントリーミュージックのメッカでナッシュビルのダウンタウンにはライブハウスが所狭しと並んでいることが判明して第2ガッツポーズ！！なおかつテネシーといえばジャックダニエルに代表されるテネシーウイスキーのメッカと教えられ第3ガッツポーズ！！。『おいおい仕事そっちのけか？』と呆れられそうですが、これは呆れてもらっては困ります。およそ考え付くすべての自分達に備わっている能力と集中力の限りを尽くして作業は丁寧に完璧に完了してきました。仕事が終わって空港の近くのホテルに移動する際、タクシーを現地の元請さんに手配していただいたのですが、なぜかこれが巨大リムジンで、疲れ果てて作業服のままで爆睡する私の写真を載せさせていただきますので、その写真からいかに作業がハードで緊張を要するものだったか感じ取っていただければ本望です。そしてまたナッシュビルのダウンタウンのライブハウスでのカントリー&ウエスタン演奏の写真も添付させていただきますので、その写真から最高の仕事をなし終えた後の戦士の休息がいかに充実したものだったかを感じ取っていただけたらこれまた本望です(笑)！。まさにジャックダニエルは五臓六腑に染み渡りました！！

帰りの空港でバーガーキングのハンバーガーがあまりにデカイので分解して食べていたら、となりでのり巻きと海藻サラダを食べていたアメリカ人の親子に『日本人のくせに何変なもん食べてんだ？』と笑われました。そして『日本食は未来のアメリカンフードだ！』と大のお気に入りようでした。久しぶりに使う英語で何とかかんとか話していくうちに、最後に『個人的な質問をして申し訳ないが、君たち日本人は北朝鮮に対してどう思っているんだい？』という質問にはまいりました。『そんなもん英語で流暢に説明できたら、いつかハワイで空調会社経営しとるがね』と内心思いながら『すみません、その質問は難しすぎますから〜残念！』とお断りしたのですが、彼は真剣な表情で『いつ核爆弾が飛んでくるかわからないような危険な状況だと自分は感じているのだけれど、日本人は何にも感じていないのか？』と呆れたしぐさで驚いていました。

事件や事故というものは突然平和な日常生活に切れ目を入れるように発生し、そしていつでも何か起こった後に『何でそんなことに気づかなかったのか？』とか『危機感の欠如』とか『管理マニュアルの不備』とかがお茶の間コメンテーターによって他人事のように声高に叫ばれ、それを見ている視聴者もうんうんとうなずき、他人事のように同調してミスを犯した当事者に怒りを増幅させていく。しかしミスを掘り下げていけば掘り下げていくほど最終的に日本人気質に行き当たったり、日常の自分の何気ない行為に行き当たったりすることはよくある事で、報道する側のTV局がお客さんである視聴者にそのことを真摯に伝えようとしない事に不信感を感じてしまいます。

『あんな大きな排水口があるのに何でもっと慎重に管理しないの』と言って呆れ返っている人たちが、『いつ核爆弾が飛んでくるかわからないような危険な状況だと自分は感じているのだけれど、日本人は何にも感じていないのか？』と外国人からは呆れられている。

排水口管理のマニュアルが不在と言われているが、核爆弾が飛んできたときの避難場所の打ち合わせは各家庭でなされているのだろうか？原子力発電所付近に住む家庭の引越し率が上昇したというデータも見たことがない。

国家レベルからさかのぼれば、お役人さんの使命感とか職業人意識を向上させることなく予算削減のために人数だけを削減すればプールだけじゃなくとも巡回できる公共設備は当然減少するだろうし、企業が公共設備の意義を認識することなく、ただ単に売り上げの一部として計上するだけの工事意識であれば、入札で工事業者が変更しても危険箇所の何の引継ぎも発生しないだろうし、作業業者も単にお金儲けのためだけであれば、ややこしい図面なしで現地で安全柵を1枚1枚あてがって適当にガガガとアンカーボルトを打って取り付ければそれが1番簡単安上がりだし、メンテナンス業者も取り外した柵をごちゃ混ぜにして錆落として塗装でもすればどれがどの場所についていた柵かわからず、なおかつ現行合わせでもともと取り付けた柵なのでボルトなんか合うわけなく、いろんな人が今まで強引にねじ込んでいるのでねじ山なんかつぶれればなしで、こんな水のない6月の太陽で焼けたプールで延々何時間も点検清掃作業して最後に柵のねじが取り付けないとわかったときに、さてお茶の間の何人の日本人が自分の立場に置き換えたときに、わざわざ工具とボルトを取りに会社に引き返し、ねじ山をきれいにタップでさらえて、新しいステンレスのボルトを24本取り付けから真っ暗になった家路に帰り一文の得にもならないが『自分の良心と魂』を裏切らなかったという自尊心であふれるうまいビールを飲むことができるだろうか？

『ラクシテコウリツヨクカンタンニモウケル』という名の悪魔が日陰から針金を差し出したら、汗だくで朦朧としているあなたは決して受け取らないという自信があるだろうか？。

我々の仕事は保全作業で非常作業のため、常にこういう似たような状況にさらされていて、常に精神の選択を迫られていると思います。そういう時確かにマニュアルがあればしぶしぶでもそれに従うことができるわけですが、すべてにマニュアルが存在するわけではない、誰も見ていない、やっても一文の得にもならない状況の中で、『心ある選択』をする為には個人個人の心の中に『損得勘定を越えた強い思い入れ』を常日頃から育てていないと難しいと思います。理念といってもいいかもしれません。

今回『このプールは実は来週娘が遊びにくるプールなんだ！』なんていうプールであれば点検がおのずと慎重になるように、『俺達が行かないとあの北米の巨大工場が稼動しない！！』という強い思い入れで最高の仕事をし、山ほど捨ててあったポイ捨てタバコの吸殻も掃除してきました！(特別なときは人間よくがんばれるもの。。。)

でも本当の問題は日々の地味な仕事に如何に丁寧に粘り強く取り組めるかです。

一瞬『とほほ』と肩を落とし、『それでも！！』と顔を上げ、『なんとか』やりきる。

完了してしまえば、『なんだか自分が誇らしくて気持ちいい』。

そんな感覚を共有した集団を作りたいと思います。

長い道のりを要すかもしれませんが、『社風』とはそんな風にしてできるものではないかと思っています。

頭の中の『理念』を体の中の『社風』が後押しするのだと思います。

感謝！！ 羽原篤史

